

動物の診察室から

〇 44 〇

12月のある日、元気がない猫ちゃんを診察しました。その子の口の粘膜は、白くそして黄色になっており、重度の貧血と黄疸が予想されました。検査の結果は、猫エイズ（猫免疫不全ウイルス）が陽性で、ノミが媒介して赤血球を壊してしまふ「猫伝染性貧血」のために、赤血球のパーセント

そこで、その子には病

障害や器量：訳あつて

れませんで、病院に残っています。

それ以外の子たちも、器量が悪かったり、皮膚病があつたりともらわれそびれてしまつた猫たちです。

その中で高齢になつた猫たちもいます。ももちゃんと言ふのは、年をとって腎臓が悪くなつたため、今はみんなと離れて、病院の入院室で暮らしています。

× ×

が12%と非常に少なくなつていました。赤血球のパーセントの正常値は40〜50%で13%を切ってしまうと生命の危険性があるため、すぐに輸血が必要でした。猫にも血液型がありま

院の猫、マイケル君が献血をすることになりました。マイケル君は体重5kgの6歳の男の子です。軽い鎮静剤をかけて50ccの血液をもらいました。そして、その血液のおかげで貧血の猫ちゃんは一命を取り留め、その他の治療もうまくいき猫エイズには感染しななまですが、普通の生活に戻ることができました。

現在私の病院には11匹の猫たちがいます。以前は3、4匹で、医局にいたのですが、だんだんと増えてきて数年前に、5畳ほどの部屋をつくりそこで暮らしています。みんな訳ありで、白黒のトム君は、4頭で捨てられたのですが、肋骨が内側に入り込む先天性の奇形「漏斗胸」で、他の兄弟はもらわれていったのですが、矯正手術をした

この連載の以前の記事をみたいという問い合わせが多いので当病院のHPに載せておきました。http://www.sounmura.jp



当病院の入院室で暮らしているももちゃん

くらし